
夏唄

幼井 睦

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏唄

【Nコード】

N7156K

【作者名】

幼井 睦

【あらすじ】

昭和40年の夏

年に一度の夏祭りの、その日――…
僕らは、【禁忌】を犯した。

――タタラレタのか、カナッタのか――？

うだる蜃気楼のなかで、

心地よい宵闇の風に、
僕らはたしかに、その、
？唄？ を聞いていた。

祭囃子

―昭和32年 初夏

夏の夕暮れ。空は、ほんのりと夜の色へと染まってゆく。

時折、吹く風は昼間のような熱さはなく、ただ、生ぬるい。

一人とぼとぼと歩く、でこぼこした畦道には、ヒヨロリとした電柱が数本立っているだけで、人が通る気配はまるでない。辺りはすでに暗く、見上げた空に月が浮かんでいた。

足下を見てみると、長く伸びた自分の影が夜の闇へと溶け込んでいく。

踏み出す自分の一歩先は、別世界へと繋がっているんじゃないのかとか、変な事を考えてしまう。

頼りの電柱は、夜道に薄気味悪いスポットライトをつくり、時々、ジジッと音を立てながら点いたり、消えたりを繰り返している。

それは逆に恐怖心を煽るだけで、何の役にも立たない。

はあ…、と溜め息をつきながら、足早に、その場を立ち去る。

もちろん、いつもはこんな道を通ったりなんかしない。

今日は特別だった。

急いでいたから、近道をしたのだ。

なにせ今日は、年に一度の夏祭り。

もう少し進んで行くと、きつと祭囃子や、太鼓の音、人々の楽しげな声が、聞こえてくるだろう。

それに、遅刻した自分を待っている友人たちがいるはずだ。

だから私は急がなければならない。

少しでも早く、彼らに合いたいから。

遅刻した言い訳を考えながら、走りだす。

暗くて怖い、この道を。

残された宵闇に、寂しそうにひぐらしがカナカナ…と鳴いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7156k/>

夏唄

2010年10月21日20時21分発行